唯物論の時代

松村　健吾 *

The Age of Materialism

Kengo MATSUMURA

1963年にノーベル医学・生理学賞を受賞したJ.C.エクルス（1903-1997）（エックルスという表記もある）は自己の生涯の課題であった脳と心の問題を最終的に解決すべく晩年1989年に『脳の進化』という著作を書き上げた。それは人類の脳の進化を生物学的な視点から描き上げた壮大な試みであり、全10章からなるものであった。「私は9章まで忠実にダーウィン主義の唯物論を遵守し、10章でそれに目的論的な概念を付け加えた」とエクルスは述べている。第10章で著名な生理学者はこう述べる。「唯物論者の答えでは各人の独自の経験を説明できないので、私は自己あるいは魂の独自性を超自然的な精神的創造に帰することを余儀なくされる。神学の用語で説明すると各自の魂は神の新しい創造によるもので、受胎と生誕の間のどこかの時点で胎児に植えつけられる。」[1]

東洋の唯物論的な雰囲気の中で育ってきた私には何とも驚くべき発言であるが、20世紀においてさえも、西欧の思想界ではこのような観念論が、しかも自然科学の領域で生き続けていたことは記憶にとどめておくべき事柄であろう。思えば波動方程式で有名なシュレーディンガー（1887-1961）もその著『生命とは何か』、において遺伝の仕組みを生物学的に解き明かして、最後に至って「負エントロピー」なる概念を持ち出して、魂の不死を主張してその著作を閉じていた[2]。また人間の自由意志の存在を否定するかのような自由意志に先行する脳内のニューロンの無意識的活動を発見したベンジャミン・リベット（1916-2007）さえもが「意識を伴う精神場（CMF）」なる観念論的主張を展開するのにも驚かされる[3]。また量子力学を持ち出して意識を説明しようとしたペンローズの観念論（プラトン主義）にも驚かされる[4]。自然科学の分野においてさえも20世紀西欧思想界では宗教的観念論が厳然として存在していたようである。

だがその西欧においても21世紀には思想界も大きな変化を体験しているようである。現代アメリカの代表的な哲学者J.R.サール（1932-）は2004年に『マインド・心の哲学』という著書を出版した。サールによれば、「私が敬意を払っているここ数十年の見識ある哲学者たちのほぼ全員の間で、観念論は完全に力を失っている」ということである[5]。唯物論の時代が到来したことになる。（戦前の日本の唯物論哲学者戸坂潤は佐渡で「おけさほど唯物論はひろがらず」と嘆いたが、それから70年の間に時代は唯物論へと大きく舵を切ったようである。）ただしサールの立場は完全に唯物論ではなく、彼は唯物

＊大東文化大学文学部教育学科教授

論の欠陥を補うべく「生物学的自然主義」の立場を採用する。その立場に対するコメントは今は省略する（後述）。私が確認したいのは、21 世紀は唯物論の時代である、と西欧の思想家までもが主張し始めているということである。（ただし彼らの多くは「唯物論」という言葉を未だに嫌い、サールの例にも見られるように「自然主義」という言葉を使用しているようである。）背景には自然科学の発展があり、物質の複雑な機能や構造が分子レベルで解き明かされようとしていることがあるであろう。もちろん今後とも唯物論を批判する論者は多数登場するであろう。チャーマーズ（1966 〜）などがその例である[6]。伝統的な観念論を固持する思想家も存在し続けるかもしれない。また唯物論の正しさを部分的に承認しながら、その不十分さを批判する立場も数多く見られる。そのような中で「唯物論とは何か」と尋ねることは、緊急にしてかつ重大な意味を持っているであろう。もちろん答えそのものが多様に錯綜して、混乱を引き起こすことも心配されるが、知的営みは各人の楽しみであるとともに、義務でもあるであろう。

一　近代唯物論の歴史

17 世紀ヨーロッパの科学革命は「物質」を中世的観念論から解放し、物質に自立性を与えることによって展開していった。ガリレオやデカルトは物質を精神的呪縛から解放するために物質を惰性的（慣性的）なものと想定した。運動している物質は運動し続け、静止している物質は静止し続ける。精神がどんなに物質を止めようとしても、また運動させようとしても、精神の念力は物質には作用しない。物質は精神から独立に存在し続ける。世界には精神と物質の二つの実体が存在している。両者は相互に関係することなく自立している。だがこの二つの実体は実は神の創造の産物である。神がどのようにして物質を創造したのかということを彼らは共に何も語っていない。だが最初の運動を与えたのは神である。神が運動を与えない限り、物質は運動することはない。だが運動を与えられた物質は運動し続けるのである。このように 17 世紀の物質は惰性的物質であり、自己運動する物質ではない。自己運動する物質が存在しない以上、17 世紀には唯物論は存在することが出来ない。どんなに唯物論的な外観を呈していようとも、惰性的物質は神を必要としているのである。惰性的物質は実は幾何学を基盤として成立した物質概念である[7]。それは幾何学的物質であり、形と数と場所を所有しているが、運動を開始するエネルギーを欠いている。幾何学的物質は神によりエネルギーを与えてもらわないと運動できない。しかも幾何学と神とは 17 世紀において奇妙な姻戚関係を形成していた。ガリレオは言う。「自然の真理は数学の文字で書かれている。」デカルトにとっても自然の、つまり物質の真理を解き明かすのは数学・幾何学である。物質の真理たる「延長」は感覚によってではなく、幾何学に精通した精神によって捉えられるのである。彼らにとって幾何学はいわば「神の科学」なのである。幾何学的明証性が自然の

真理なのである。ホッブスも言うように「幾何学は神が人類に与えてくれた唯一の学問」なのである[8]。17世紀は幾何学の世紀であったと言える。人々は自然を単純明快な空間的直観で捉えたかったのであろう。それは大航海時代によって自分たちの生活空間が一挙に拡大しようとしていたヨーロッパの人々にとって羅針盤となるものであった。神の加護の下、この羅針盤と望遠鏡をもってすれば、広大無辺の世界も恐るに足りないのである。

18世紀はこの幾何学に基づく惰性的物質観を批判した。唯物論も観念論も共にそれを批判した。彼らは共に幾何学から離れて「生命の哲学」を構想した。生命をモデルとすることで物質は運動するものとなった。カントに代表されるドイツの観念論については今は省略しよう。フランス唯物論は物質の自己運動を主張して、惰性的物質を批判することによって、神をも不要なものとした。物質がひとりで運動できるのであれば、どうして神が必要であろうか。ジャン・メリエに始まる18世紀フランス唯物論はラ・メトリ、ディドロ、ドルバックと続いて、物質の自己運動を主張する唯物論を近代ヨーロッパにおいて初めて宣言した。哲学史においてそれは輝かしい日の出であった。ラ・メトリは言っている。「今や明らかにデカルト主義者、スタール主義者、マルブランシュ主義者およびその他の言及に値しない神学者たちに対して、物質は自己自身によって運動すると明瞭に証明された。」[9] ディドロもまた言っている。「君は幾何学と形而上学を君の好きなだけ駆使するがよい。しかし物理学者であり、化学者である私は、物体をば、存在し、多種多様で、様々の性質と作用を持ち、…宇宙の中を自ら動き回るものと見なす。」[10] ドルバックもこう述べる。「自然は大きな全体であり、…運動は物質の本質から必然的に出てくる在り方である。」[11]

このように18世紀思想は物質の自己運動を唱えることによって、人間をも含めた世界の一元論的な説明を可能とするに至ったのである。古代ギリシアに一時的に花開いた唯物論はここ北欧の地に初めて本格的に展開可能となったのである。17世紀の二元論は克服されたのである。唯物論によって世界の一元論的説明が可能になったのである。だが本当に二元論は克服されたのか？その後の歴史を見れば明らかなように、二元論は克服されることなく残存した。何といっても唯物論は出来てまだ間もない思想だったのである。「石も感じる」とディドロは息まいたが、その具体的プロセスはまだ何も示せていなかった。物質がどのようにして意識を、精神を生み出してゆくのかを唯物論はこれからゆっくりと示してゆかなければならなかった。唯物論はまだ宗教にやっととって代わった「信念」であった。

19世紀においては、唯物論はマルクス主義の登場によっていびつな変化を体験した。唯物論に無縁なドイツに生まれたマルクス主義は18世紀フランス唯物論の伝統を無視して、社会における生産を中核とする生産唯物論となった。いわゆる「史的唯物論」がそれである。それは身体的存在としての人間と、人間たちの基本単位である家族を無視した社会理論であり、生産力と生産関係が社会の「物質的土台」であるとする形而上学

であった[12]。だが19世紀はマルクス主義とは別に自然科学の発展期であり、生物学や医学や脳科学を生み出し、20世紀は素粒子物理学、量子力学を生み出し、化学も生物学も脳科学も本格的な展開期を迎えている。また人類学や動物行動学、霊長類学なども成立し、学問分野の裾野を広げている。自然科学は石から生命へと至るプロセスを示し得る段階に到達しようとしているのである。ここで現代の代表的な哲学を見ておくことにしよう。

二　チョムスキーの哲学

20世紀の言語学をリードし続けてきたチョムスキーの言語学は内的言語と外的言語を区別して、内的言語こそが言語であるとする内在主義の立場をとる。それは彼の言語学が当時のアメリカで流行していた行動主義心理学及びそれに影響された言語学の批判として登場してきたという歴史的経緯に強く規定されたものである。彼は言語を外的な形式ではなく、あくまでも内的な言語能力と見なそうとしている。しかもその能力は人間に生得的であるとするところから、チョムスキーは「デカルト派言語学」なる用語を生み出して、自己とデカルトの近さを明示する。しかし20世紀人としての彼はデカルトと同様の精神と物質の二元論の立場に立つことはできない。彼にとっても「形而上学的二元論は論外である」。彼は自らの言語学を「生物言語学」と呼び、デカルト的二元論から離れようとする。彼は人間の有する言語機能を「心的器官」として捉え、言語能力の科学的説明を企てる。ただしチョムスキーは自然科学を全面的に支持するわけではなく、自然科学は物事の一面を捉えたものであるという批判的視点を保持している。言語の心的器官も脳の進化の一定段階において生じたものであるが、その革新は「創発の現象に依拠していたであろう」としている。20世紀に流行した「創発 emergence」の概念はそれなりの有効性を持つ概念ではあるが、そのままでは何も説明しない無意味な概念である。チョムスキーの場合も「創発」の中身の説明はないままである。

内在主義者チョムスキーによると、これまで長く主張されてきた「言語の役割の本質はコミュニケーションである」とする理論は不十分であり、むしろ言語の本質は「思考の言語」たることにある。そのようなものとしての言語の本質は限りなく多様な句を作り出すことのできる「離散無限性」であり、これはまた「再帰性」とも呼ばれている。これは人間の「数」の能力にも見られるものであり、チンパンジーなどには見られない人間にのみ固有の創造的能力である。しかしこの能力はチョムスキーによると進化の必然的過程で登場したものではなく、何らかの偶然の結果登場してきたものであるという。こうして彼は自然科学的説明から離れて、一種の不可知論の世界に入り込むのである。彼は言語機能自身の内部構成も、「思考のシステム」と「感覚運動システム」に区別する。まるでカントの「認識の二本の幹」であるが、チョムスキーの理論ではカントの理論同

様にその二つの幹が根元でどう関係しているのか、不明のままである[13]。内在主義の道を歩み続けるチョムスキーはどこまでいっても唯物論者になることはなく、観念の世界をさまよっている。人間の独創的な創造性は宙に浮いたまま称賛されているのである。チョムスキー本人は、形而上学的二元論に取って代わる「方法的二元論」さえも避けなければならないと主張してはいるが、二元論からの出口が見つからないのである。それが現代アメリカ哲学が直面している困難なのである。

三　サールの哲学

現代アメリカの代表的な哲学者の一人がサールである。彼の代表作『マインド・心の哲学』を少し見ておこう。サールは自分の立場を「生物学的自然主義」と呼ぶ。それは唯物論と二元論を共に避けるものである。生物学的自然主義のテーゼは以下の四つである。①意識状態は現実世界における現実の現象である。②意識状態は脳内におけるより低レベルの神経生物学的な過程によって引き起こされている。③意識状態は脳内において脳組織の性質として現実化されている。④意識状態は現実世界の中の現実の性質であるから因果的に機能する。

「心的なものと物理的なものとを実体的に区別する従来の仮説は間違いである、意識とは組織レベルの生物学的性質であり、物理的世界の一部である。次に、意識を因果的に脳内の神経活動へと還元することはできるが、それは存在論的な還元を導くものであってはならない。つまりそれによって意識を消去してはならない。意識は一人称的な存在論を備えており、それを三人称の用語で定義しなおせば、意識という概念を持つことの意義を失うことになる。唯物論は、意識とは脳過程に過ぎない、と主張して、意識の質的・主観的・一人称的な現象を否定するが、私はそれを物理的世界の一部だと主張する。」[14]

以上がサールの説の概要であるが、ここに端的に見られるごとく、筆者サールの批判する唯物論は単純化された一元論である。批判者の常としてサールもまた一元論を単純化しているが、単純な一元論的な唯物論者（私はこの立場である）も主観的な意識の存在を否定してはいないであろう。問題は脳内組織と意識との関係を具体的にどこまで説明できるかということであろう。もちろん具体的な説明が可能となるのはまだまだ先のことなので、今後とも様々な仮説、つまりは哲学が現れるであろう。哲学である限りそれは唯物論であるか、観念論であるかのどちらかなのである。哲学も科学も、一つの思想である。それは未知なる部分の存在の解明に挑戦する知的営みである。科学は自己の領域を一定の限界に限定するが、哲学は常に全体を目指そうとする。脳科学が意識現象を脳内のあるいは身体内の神経プロセスとして解明しようとするものであるのに対して、哲学はそれを哲学固有の意識論と関連付けて説明しようとする。意識論、認識論を展開

してきた観念論哲学者たちはそれを身体構造とほとんど関連付けることがなかった。現代の哲学はこの知られざる通路を切り開こうとする努力である。理念の糸を手繰って進むのか、物質の流れに身を委ねるのか、どちらかしかない。第三の道もあるかもしれない。それを否定する必要はない。要はそれをどこまで説明できるのかということであろう。

なおサールの考え方で気になるもう一つの点は、彼が意識をひたすらに「脳内」現象として捉えている点である。意識を生み出しているのは脳であろうが、脳だけが意識を生み出しているとは私には思えない。私という「身体」全体が意識を生み出しているのではないだろうか（ダマシオもそう考えている）。脳だけが栄養補給を受けながら生きているときの意識と身体全体を備えているときの意識では大きく違うであろう。考察すべき大きなテーマであるように思われる。

サールの唯物論批判に代表されるように、唯物論を批判する現代の論者たちは、唯物論は物質一元論の還元主義であり、還元主義では意識の独自性、例えばクオリアの問題などを説明できない、というものである。唯物論の立場をとるのであれば、そうした問題を物質一元論の立場でどのように説明するのかを示さなければならないであろう。

四　唯物論とは何か

1　哲学の登場

人間は思惟する存在であり、自らの思惟を自覚した時、自己を意識するとともに、自己を取り巻く様々なものをも意識する。そこには意識する自己と意識される対象がある。それら自己を取り巻く対象をひとまとめにして「物質」と呼ぶとすれば、自己はそれとは区別された「心」「精神」として意識されることになる。この「物質」と「精神」という二つの概念は共に「存在」という抽象的な純粋思惟の概念のもとに包摂されて一つの「世界」を構成する。人間の認識能力が可能にする「概念」なるものは奇妙な単純明快性を備えており、たった二つの概念で全て・全体を表現することが可能となる。「精神」と「物質」という二つの概念で「世界」が構成される。この単純化によって精神は感覚的現実を越えて自己内に一挙に世界＝全体を構成する場を獲得する。これをヘーゲル風に「精神の空間」と呼んでもいいだろうし[15]、リベット風に「精神場」と呼んでもいいだろう[16]。これによって、現実世界とは別の観念世界が成立し、この観念世界は単純明快な二つの言葉で構成される。この腕で抱くことのできない世界が、この目で見渡すことのできない宇宙が思惟の内で構成される。「この世とあの世、天国と地獄、高天原と葦原の中つ国、現象と本質、原子と空虚、質と量、思惟と延長、主観と客観」等々。これら基本的概念を元素としながら精神は多様な観念世界を構成してゆく。そしてこれ

ら概念の中でも根本となる二つの存在の序列、あるいは資格をめぐって、「物質」に与する者と、「精神」に与する者とが現れる。前者は唯物論者であり、真実に存在するのは物質だけで、精神は物質の一現象形態であると主張する。後者は観念論であり、真実に存在するのは精神であり、物質は精神の一現象形態、疎外態であると主張する。だが人類700万年の歴史において、唯物論とか観念論とかという「哲学」が登場したのはたかだか2600年前のことである（あるいはインド哲学や中国哲学をも顧慮して3000年前と言った方が妥当かもしれないが、いずれにしてもあまりにもつい最近の出来事である）。

哲学以前には宗教がその役割（世界を構成するということ）を代行していた。もちろん宗教は単なる哲学のような狭い営みではなく、広く人間集団を巻き込んだ多様な営みであったであろう。ネアンデルタール人は死者の埋葬をしていたというから、彼らは既に宗教を持っていたであろう。宗教はおそらくは死者の埋葬に由来するものであろう。人間だけが死者を埋葬する。埋葬は単なる同類意識だけからでは生じてこない。サルやチンパンジーたちも自分の仲間を識別しているが、彼らは仲間を埋葬しない。埋葬するためには目の前に転がっている物体の在りし日の記憶がまざまざと蘇ってこなければならない。記憶は過去の記録であり、過去を記録できるのは身体と脳の細胞以外にはない。海馬を中心とした記憶装置とニューロンのシナプス結合が、時間の闇を貫いて蘇ってくる。人間は死体を前にしてその者の過去を思い出し、その死を悲しんで、彼らを埋葬し、そして彼らをこの世から葬り去る。記憶と結びついた悲しみの感情が宗教の起源と言えるかもしれない。悲しみという感情は個体としての人間の存在の広がりを示している。個体Aが死んだということが個体Bの悲しみを誘うということは、Bの存在の中にAがくい込んでいたということである。BはAとの共同の中に存在していたのである。人間たちはその共同を目に見える形にするべく、埋葬・葬儀を遂行してきたのであろう。葬儀は悲しみの感情を形に表したものである。葬儀によって悲しみは物体化される。人間のこの自己外化は自己の主観性を表出すること、つまり客観化することであると同時に、主観性の喪失であり、客体性の樹立である。葬儀によって死者は現実世界から消えて、別の世界に送られる。そしてそれによって悲しみは薄れて、やがて消えてゆくのである。何事もなかったかのように時は流れてゆく。悲しみという感情は今や冷たく固い墓石に変身しているのである。ただし二つの世界は意識において結ばれている。意識は時折、亡き人を回想するのである。宗教が成立する頃になると、意識は世界を様々に区分して、複雑な世界を構成してゆくことになる。人間の存在は単なる個体の領域を越えて、他者との複雑な関係の中に根を張ってゆく。彼は夫であり、人の子の父であり、漁師であり、村の世話役である。なお「夫」とか「父」という規定性は人間に最も近い類人猿たるチンパンジーには見られないものであり[17]、人間固有の規定性である（ただしゴリラには父親がいる）。人間のオスたちは性欲を満たした後も、何故か相手のメスと生まれてきた子供のもとに通い続けたようである（19世紀に想定された「乱婚」なるものは人類史においてなかったと思っていいだろう）。人間たちは性欲を満たすという

オス固有の欲望からすれば極めて無駄な行為をするようになったものである。ともかく物好きなオスの登場によって、人間たちには奇妙な感情（愛と憎しみ）や義務感（他者を助ける）までもが生まれてきて、オスとメスの持続的な結合としての「家族」が生まれてきたのである。そして家族は既に存在していた集団（チンパンジーも集団で暮らしている）の中に着実に根を張っていったであろう。人間たちの地域集団は強固な地縁社会へと変身していったのである。

ネアンデルタール人が宗教を持っていたのであれば、ホモ・サピエンスも宗教を持っていたであろう。だとすれば少なくとも20万年ほど前からホモ・サピエンスの宗教はあったのかもしれない。宗教が登場することによって精神が新たに人間たちをより緊密に結び付けるようになったであろう。それまでの20人から40人ほどの集団は一挙に数を増していったであろう。大きな集団とそれを支えるイデオロギー体系（宗教）は人間たちの脳細胞を活性化させて前頭葉や側頭葉を発達させていったかもしれない。ブローカー野やウェルニッケ野や角回が発達して、ついに人間たちは「言葉」を話すようになったであろう。ただし現生人がいつ頃から言葉を話すようになったのかは明らかではない。一説では7万5000年前だとされているが、確かな証拠は何もない（装身具の登場が根拠とされているようである）[18]。とまれ言葉は集団の規模を限りなく広げていったであろう。人間たちの共同は言葉という形を得ることによって、強い絆を作り上げて、社会の仕組みを築き上げていったであろう。人間たちは狩猟採集生活を続けながら洞窟や岩陰から出て、平原に集住し村を作り、農業を開始し、やがて都市を作り出したであろう（これは高々1万年前のことのようである）。人間の頭脳が描く空間が自然の空間の中に出現した。人々は草原の中に都市を、村落を作ることによって、自らの観念の威力を実感したであろう。人間たちは自分自身に確かな自信を持つようになったであろう。そしてついに都市の広場で哲学は宗教の隙間をかいくぐって登場したのである（2600年前）。宗教が集団の意識であるとすれば、哲学は個人の意識である。人間は哲学によって単なる集団的存在から抜け出して、一つの個体として大地に足を踏み込んだのである。そして人間は空を見上げたのである。足元から伝わってくる大地の息吹を感じながら（唯物論）、人間は遠い世界へ憧れを馳せるようになったのである（観念論）。そして多くの者が古巣を後に旅立ったのである。だが身長150cm--170cm、体重40kg--60kgの人間にとっては地球はあまりにも大きな世界であった。大局的に見るならば人類は世界中に広がっていったが、それぞれの人間たちは一定の狭い地域（古巣・古里）に固定的に住みついている動物だった（多くの動物たちが縄張りをもって生活しているのと同様である）。15世紀まで、誰一人世界を経巡った者はいなかった。その後に展開するヨーロッパによる「大航海時代」は人間たちにとって巨大な意味を持っていた。世界中のどの地域にも自分たちと同じ人間が暮らしていた。文化は多々異なるにしても、存在していたのは同じ種に属す人間ホモ・サピエンスであった。もちろん17世紀、18世紀のヨーロッパの人々の意識においては、アジア人、南北アメリカ人、アフリカ人は自分たちとは異

なる人種の人間であったし、同じヨーロッパ人でさえも互いに異なる「民族」であった。こうした「人種」とか「民族」という誤った概念が訂正されるには更に2世紀が必要であった。二度の世界大戦の後、今や人間はただ一つの種、ホモ・サピエンスであることが明白になった。ただし今もなお、人種とか、民族の違いによる対立・紛争は終わっていない。人間が地域的動物である以上、それは避けがたいことなのかもしれない。ホモ・サピエンスは20万年前にアフリカに登場し、6～7万年ほど前から徐々にアフリカ大陸を出て、世界中にゆっくりと広がっていった。その頃にはホモ・サピエンス以外にもネアンデルタール人やフローレス人などもいたが、彼らはやがて地上から姿を消して、ホモ・サピエンスだけが栄えることとなった。当初は数万人と想像されている人口は今や70億人を越えている。人間とは何かを理解するためには、世界史の教科書に紹介されている人類5000年の歴史だけでは到底不十分である。人類700万年の歴史と、ホモ・サピエンス20万年の歴史のほとんど全てはまだまだ暗黒の内に眠っているのである。唯物論はこの暗黒の過去を探索する必要がある。

2　幻想としての自由な存在

哲学の歴史においては観念論の方が断然人気があった。ゆとりに任せて哲学者たちは理念の宮殿を築き上げてきたが、その宮殿はフランス革命の前後に大きく揺り動かされることになった。精神の指導を離れて物質が自己運動を開始したのである。ドイツ観念論は「生命」「有機体」を持ち出すことによってこの最後の革命を乗り切ろうと努力したが、押し寄せる唯物論の奔流に抗することはできなかった。だがそれでもなおヨーロッパの科学者たちは長い観念論の伝統に育まれており、20世紀になっても観念論を守ろうとして様々な努力を続けてきたのを我々は見てきたところである。観念論も確かに人間文化の貴重な遺産である。もしかしたら人間だけが観念論を作り上げるのかもしれない。我々は自分を思惟する存在だと意識するが、それは同時に自分を自由な存在だと意識することを意味する。確かに現代ではすでに紹介したように、リベットらの実験によって、我々が自由意志で自分の腕を挙げようとするとき、それより0.5秒前に脳が筋肉を動かす指令を出し始めている。だがそれによって「自由意志は存在しない」という必要はないのである。自由意志をそのような肉体的局面で発揮せずとも、もっと「精神的」局面で考えればいいのである。例えばどの会社に就職するか、どの思想を選ぶかというところで、自由意志を発揮すればいいのである。そうした思惟行為でさえも脳内のニューロンの活動によって規定されていると言ったところで、ニューロンが会社を選んだわけではない。ともかく我々が自分の自由意志でそうしたと「思い込んでいる」ことが大切なのである。自由だと思い込んでいるからこそ我々は自分の行為の結果の責任を取ることが出来るのである。もちろん責任を取りきれないことも多々あろうが、責任は感じるのである。もし我々が自由意志を欠いていて、必然性に衝き動かされているだけの存在

だとすれば、人間社会に犯罪はなくなるのである。我々が道徳的存在であるためにも、我々は「自由意志を持っている存在」でなければならないのである。ただしそれは一部の論者（例えばラマチャンドラン[19]）が指摘するように、我々人間が持つ「幻想」なのであろう。物質的存在としての我々は、その他の無数の物質に取り囲まれて存在している。そのような一存在である我々が、物質の相互作用を超越した自由な行為を遂行することは出来ようはずもない。我々の存在自身が物質の地球上での長い営みの産物である。生命としての我々は確実に単細胞生物のアメーバ―から連綿として続くDNAの進化の一帰結である[20]。我々は自分の存在を自分で作り上げたのではない。しかし我々の脳が進化する過程で、「私は自由なんだ」という意識が形成されてきたのであろう。それは幻想であったとしても実は脳自身がそのような幻想を作り出す仕組みを作り上げているのである。幻肢の例に見られるように、幻を作り出しているのは脳と身体であり、「腕が欲しい」という精神の主観的願望が幻想を生み出しているわけではない[21]。幻想とか、虚構といったものも、決して精神の独創的な産物ではないのであり、物質的な背景のもとに初めて可能となるものなのである。とまれ人間とは自分を自由だと思う動物なのである（ただし猫やカラスも自分を自由だと思ってはいないであろうか）。人間とは主観性を極度に発達させてきた存在なのである。人間の主観性は自己感に基づいている。人間を知るためには「自己」とは何かを知らなければならない。

3　自己とクオリア

先に、観念論は人類の貴重な文化遺産だ、と言ったが、自己の問題を集中的に論じたのは観念論である。デカルトは自己を「思惟するもの」と呼んだ。思惟・意識なくして自己は成立しない。思惟は言語なしにも存在するが、言語を媒介にして初めて意識的な思惟となる。言語は全て普遍的なものを表現する。「机」は「全ての机」を意味する。「思惟するもの」は全ての「思惟する人間」を意味する。言葉を介して、私＝自己は突然、普遍的な存在と化す。みんな、「私」である。「思惟」という機能に立脚することによって全ての人間が「私」「自己」という存在様式をとることになった。フィヒテは「私は私である」という端的な自己同一性（論理学の同一律）が、「私」の存在を可能にすることに気付き、翻って全ての存在の根源を私の存在に求めた。「私は存在する」。私は神の手を離れて自分の力で存在するに至った。私は単なる思惟する存在ではなく、存在する存在となった。「私」は自己を意識する意識そのものとして存在するに至ったのである。意識の自己関係性が存在を現出させるのである。「私は私である」「私は存在している」。これは思惟する存在にとって、何とも否定し難い「確信」である。つまりそれは一つの感情であり、私の存在は単なる抽象的な思惟のレベルを越えて、感情という肉体的な現実世界に根付くのである。我々はこの確信に立脚して日々の生活を営んでゆく。庭の垣根にスズメが止まって鳴いている。それを見、それを聞いているのは「私」である。ダ

マシオの言う「中核意識」がこれに相当するだろう[22]。我々の身体の多様な感受性装置を一つに取りまとめて、それら多様な感覚・感情を全て一人の「私」の感覚・感情とすることによって、我々の身体は環境の中を生き抜いてゆくのであろう。我々の対象意識は常に、カントも言うごとく、「私」に伴われているのである。「私」はそうした多様な対象意識の取りまとめ役として成立したのである。手足がばらばらに行動したのではすぐに敵に捕まってしまうであろう。

こうした「感覚・運動系」の分野の他に我々人間には「悟性・純粋思惟」の領域もある。それらも全て脳の活動であることは現代人であれば誰も否定はできないであろう。脳を損傷すれば純粋な思惟活動が出来ないことは明白である。おそらくはニューロンの電磁波的作用と、それに伴う神経伝達物質の放出・受容の過程が純粋思惟を可能にしているのであろう。現代の脳科学の知見によれば、脳の後頭葉の視覚野と前頭前野のニューロンが情報を伝達する時に「意識」は生じると推測されている（後述するコッホなどの意見）。ただしこれは意識一般の説明であり、「感覚」と「悟性」の区別を脳細胞のレベルで確定することはまだできていない。「感覚」は外部からの刺激が感覚器官を通じて受容され、それが脳細胞で処理されることによって成立するが、「悟性的思惟」は外的刺激なしにも脳細胞の活動で成立可能であるという程度の違いしか指摘できない。その意味で脳科学による意識の説明はまだまだ不十分な段階である。そのような状況から、そんな自然主義的な説明では納得できないという論者も多々存在する。彼らを簡単に「クオリア論者」と呼んでおこう。確かに「クオリア」は感覚の領域で主張されるものなので[23]、ここ純粋思惟の分野で使うのは不適切ともいえるが、比喩的な用例として理解されたい。

自然科学はクオリアを説明できていないとして様々な議論がなされているが、私はそこには不適切な主張があると思っている。私が見ているリンゴの赤を科学は光の波長で説明するが、それでは私が感じているクオリア・質は説明できないとクオリア論者は主張する。それに対して例えばサールは、クオリアは一人称的事象であり、それを科学の三人称的事象と混同してはならないと反論する。一つの反論ではあろうが、それでは二元論がいつまでも残ってしまう。「クオリアを説明せよ」という要求は、今なお残存する観念論的性癖の名残ではないだろうか（ただし観念論も現代風に言えば、人間の生得的な性質なのかもしれない）。それはそもそも無茶な要求なのではなかろうか。クオリアは一人称と三人称の問題ではないのではなかろうか。例えば、私の眼の前に一つのおいしそうなミカンがある。このミカンが物質としていかなるものから出来ているかを知識のある科学者であれば簡単に列挙することが出来るだろう。だがその科学者とても、目の前のこのミカンのこの皮の大きさがどうしてあのミカンの皮の大きさではなく、この大きさなのか、このひとふくろのミカンの味がもうひとふくろのミカンの味と何故違うのか、等々の細かな問いかけに答えられようはずはない。科学が説明できるのは物質のほんの一面だけである。科学にそんなに多くを期待すべきではない。クオリア論者は

いわば駄々っ子なのであろう。どうしてもクオリアを説明したいというのであれば、それは科学の問題ではなく、文学の問題なのではなかろうか。あるいは彼らは「感覚的確信」という「思い込み」の世界に住む人々であり、ヘーゲル風に言うならば「ケレスとバッカスのエレウシスの密儀」に送られるべきなのかもしれない[23a]。

純粋思惟は物質の一形態である人間が生み出す物質の多様性の一つである。それは根源的統覚とか、純粋悟性概念といった虚構的装置によって支えられながら展開するニューロンの活動である。その意味で純粋思惟が捉えるものは人間主観に固有の形式だとも言えるであろう。だがそれは単なる主観的認識ではない。人間の認識は対象の姿を的確に把握してもいるのである。少しずつではあるが、我々はゲノムの実態を知りつつある。四種類の物質によって我々のプログラムは設計されている。我々自身が物質であるからして、我々の純粋思惟は対象である物質の姿を把握できるのであり、認識の過程は物質の相互作用に他ならないのである。この相互作用の過程に不可知論を持ち込んで、対象の真実を知ることはできないと主張することは、純粋思惟を守ろうとする観念論的陰謀ではなかろうか。自然界の色彩が赤、青、緑の三原色で構成されているのに対応して、我々の脳の視覚細胞にもその三色に対応する細胞があるという。それは長い進化の過程の産物であるとしても、脳も外界も同じ物質であるという根源的同一性に由来しているのではなかろうか。我々をいたずらに主観的存在だと強調する必要はないであろう。我々は客観性を把握できる主観的にして、物質的な存在である。物質から主観性を奪うべきではない。世界に存在する多様な物体は多様な主観性を備えて存在しているのである。犬には犬の、猫には猫の主観性があるはずである。その意味で全ての物質が主観性を持っていると言えるであろう。

4　自己＝物質の主観性

全ての物質が主観性を持つ。物質の主観性とはいわば物質の「原子核」であり、簡単に他者に破壊されないように、「自己」を守っている殻である。意識はまさにその原子核＝自己の周りを飛び回る電子のようなものなのかもしれない。もちろんその原子核は絶対的なものではなく、破壊可能な、やがては消えてゆく「虚構」である。自己の虚構性は、各々の存在する形態・姿が物質の一時的形態であるということに由来する。私も猫も、物質がひと時形成している姿である。それは空を行く雲がやがては姿を変えてゆくように、素早く消えてゆくものである。時間の中で生まれてきた我々は時間の中で滅んでゆくのである。「自己」とはそのかすかな時間を表出するものである。「私は存在する」という自己意識は、私は今という時間に生きているという意識である。我々の意識は対象意識にしても自己意識にしても、共に時間の意識であり、今現在を表出している。空間が物質の現象する場であるとすれば、時間は物質の自己が現象する場である。「今」という時間を感じているのは「自己」だけなのである。先に純粋概念たる「存在」

をヘーゲルに倣って「精神の空間」と呼んだが、同じく純粋概念たる「自我＝自己意識」を「精神の時間」と呼ぶことが出来るだろう。あるいはもっと明瞭に言えば、自己意識こそが「精神の時間の源」なのであろう。我々が作り上げる「自伝的自己（ダマシオの用語）」は自己意識が今、湧出させる過去なのである。自己意識は絶対的現在に屹立することによって、自己の歴史を編み上げてゆくのである。

物質は何種類かの基礎単位からなる複合体であるが、それぞれの物体が多様な性質を醸し出して自己を主張している。物質はやがて生命を生み出し、生命体は「自己」保存と子孫を残すべく生存する。「自己」は生命体たる物体のエネルギー源となり（自己はまるでミトコンドリアである[24]）、束の間の生命を演出する。だが生物の生命は雌雄に分裂することによって、「自己」に致命的なジレンマをもたらすことになる。多細胞生物は自己を全面的に再生産することはできなくなる。各々の自己は自己を引き裂いて相手に身を委ね、他者と結合して自己を再生産する他はない[25]。再生産された自己は自己に似ているが、自己ではない他者である。自己はもう消えてゆく他はない。役目は終わったのである。我々＝自己は長い物質の、長い生命の連鎖を一瞬担うための「虚構」である。我々の存在は自己が消え去るとともに、より基本的な物質単位へと還元されてゆく。自己などまるで存在しなかったかのように腐敗してゆくであろう。それでも物質は存在し、多様性を演出してゆく。物質はまたどこかで自己を生み出し、その「自己」は物質の束の間の饗宴を楽しむのである。

5　現代意識論

我々は意識的な存在であるが、我々の存在は意識に尽きるものではない。意識は我々の存在のほんの一面を意識しているだけであり、無意識こそが我々の存在の通常の状態である。フロイトの心理学はもはや過去の遺物となったが、彼が発見した無意識は今なお有効な視点である[26]。20世紀に発見された盲視という現象は我々の意識の一面性を端的に示している。左脳の後頭葉の視覚領域を損傷した患者は自分の右側にある光点を見ることが出来ない、いや正確には本人は「見えない」と主張している。しかし患者はその光点を誤りなく触ることが出来る。その意味で患者に右の光点は明らかに「見えている」のであるが、彼の意識にはそれが登らないのである[27]。あるいはまた交通事故などで、運転者が歩行者に気付いて、ブレーキを踏むという一連の行為に関しても、我々が危ないと意識する前に足がブレーキを踏んでいるという。意識の前に無意識的な、あるいは前意識的な行動が先行しているのである。我々は今や自らの身体性を十分に自覚して生きていかなければならない時代に生きているようである。意識である前に、私たちは物体なのだ。自分は偉いんだと言わんばかりに人混みをかき分けながら歩くのではなく、物体たる自分が多くの人にとって障壁となるんだという意識で身をよけながら歩く時代である。人間の尊厳は身体に支えられてかすかに漂う臭気のようなものである。

意識現象は我々物体にとって、街角を歩くとき金木犀の香りが一瞬匂うが、すぐにまた雑踏の中に消えてゆくようなものである。ただし匂い（意識）は消えてもその思い出は街角に残っているかもしれない。

最後に現代の代表的な意識論を展開しているクリストファー・コッホの見解に触れておこう。コッホはDNAの二重らせんモデルを唱えたクリックと共同で意識の正体を自然科学的に明らかにしようと努力してきた科学者である。コッホによればクリックは厳格な唯物論者であったようである。そしてコッホ自身も唯物論者として意識論を展開してきた。しかし彼は最新作の『意識の冒険』において、突然「汎心論 panpsychism」の立場を表明した[28]。これも最初に紹介した20世紀の欧米の自然科学者の根強い観念論的性癖と見なせるものかもしれない。ただし私はコッホのこの見方に興味を持っている。それは私が観念論に転換したということではなく、あくまでも唯物論の立場でそれを興味深い説と見なしているということである。コッホの「汎心論」とは全ての物質に何らかの「意識」が内在しているというものである。言ってみれば、汎神論の意識版である。意識の生成を、物質が複雑化した段階で生じる「創発」と見なすのは現代の一般的風潮であるが、先にも言ったように、「創発」という概念は実は何も説明していない。コッホはそのような創発という概念を使用する代わりに、意識を物質とは区別された独自の存在と見なし、意識を全ての物質に内在するとみる立場を「汎心論」としているのである。私は意識を物質とは別の存在とは見なさないが、物質の内に意識を内在させる立場は唯物論と対立しない立場だと思う。様々な物質が意識を持っていると言うと、昔風の「物活論」を連想させるかもしれないが、物質が人間風の意識を持っているというお伽噺を復活させようなどとは思っていない。物質の基本単位である原子や、原子が寄り集まった分子によって様々な物体が構成されている。それらの物体は一定の形態をもって、しばらくの間持続する。物体はしばしの間自己の形態を保存する。この自己保存を可能にする機能の一つが神経系である。神経系は外界と自己の内部を関係づけるシステムである。これが意識の実体であろう。もちろん物体の種類によってはそれらの意識を主観的に意識しない物体もあるであろう。それを「無意識」と呼ぶことにする。それは「反射」と言ってもいいだろう。無意識あるいは反射は外界を意識する主体の様式である。哲学者たちは「志向性」という言葉を愛用するが、それ（反射）こそが志向性の基本であろう。物体は外部の物体を「意識する」のである。志向性は決して人間の意識だけの特質ではない。人間たちの意識の志向性はおそらくは人間固有の身体的運動の一つである「指さし」から発達してきたものであろう。マイケル・トマセロの有名な「9か月革命」は赤ん坊の指さしによる母親との共同注意の成立をもって、人間の言語習得の基礎と見なす興味深い見解である[29]。一つの外的な物体を複数の人間が共に眺めるとき、我々の脳細胞は自己の殻を飛び出して、他者との共同空間をさまようのである。複数の意識がその対象を「ハナ」と名づけるならば、以後我々は脳内で「ハナ」を思い浮かべることが出来るのである（言語による人間の意識の志向性の成立）。

現代の代表的な唯物論者アントニオ・ダマシオは意識を単に大脳皮質の機能だけで説明する見方を批判して、他の動物たちにも見られる脳幹の網様体および、大脳皮質の古い部位と新しい皮質との関係として意識の成立を解明しようとしている。意識はダマシオによれば、「神々しいほどに古い」構造から生まれてくるのである[30]。意識は決して人間だけの機能ではなく、連綿と続く物質の、また生命の反射であり、反省（Reflexion）である。人間の脳細胞は記憶を可能にする神経細胞を発達させることによって、現在の感覚を超出して、過去を想起することが出来るようになった。それによって意識は自分固有の空間を得て、「自由」を手に入れる。意識はそれによって思いのままに過去を思い浮かべる。記憶は脳内に残されている過去の痕跡であるにしても、それは常に新たに構築される神経細胞の結合である。神経細胞が今現在、シナプス結合しなければ、過去の記憶はあり得ない。記憶は単なる想起ではなく、今現在の想像であり、活動である。意識は自由に翼を広げて観念の世界を飛び回ることが出来るようになったのである。観念の世界で意識がどんな夢を思い描こうがそれはまさに意識の「自由」であるが、その「自由」は人間という物体が可能にする反射活動である。唯物論は人間たちのこの乱反射を物質の一時的形態のささやかな熱狂、慰みとして楽しむ哲学である。感覚から区別された「悟性」はこの自由を謳歌する反射・反省活動であるが、この自由の背後に作用している物質の、ニューロンの活動を解明することは21世紀の唯物論の最大の課題であろう。それはおそらくカント風の「カテゴリーの演繹」とヘーゲル「論理学」の現代版となるであろう。思惟や言語の二元性と、内と外とを区別する性癖、物事の「原因」を求める性癖、「目的」概念への愛好などが、身体とニューロンの仕組みと関連付けられて、解明されるとともに、人間なる動物の不可思議な行動の数々が緊密な社会生活を送る動物の反射の集積として解明されるかもしれない。

1　エックルス『脳の進化』　伊藤正男訳、東京大学出版会、1990年、264p。
2　シュレーディンガー『生命とは何か』岡・鎮目訳、岩波文庫、2008年、178p。
3　リベット『マインド・タイム　脳と意識の時間』下條信輔訳、岩波書店、2005年
4　ペンローズ『心は量子で語れるか』中村和幸訳、講談社、1999年。
5　サール『マインド・心の哲学』山本・吉川訳、朝日出版、2006年、72p。
6　チャーマーズ『意識する心』林一訳、白楊社、2001年、参照。
7　フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷・木田訳、中央公論社、1974年、38-84p参照。
8　ホッブズ『リヴァイアサン』水田洋訳、岩波文庫、第一分冊、75p。訳文は変えてある。
9　La Mettrie Die Maschine Mensch ,Felix Meiner Verlag,116p.
10　ディドロ『物質と運動に関する哲学原理』小場瀬卓三訳、ディドロ著作集第一巻、法政大学出版局、270p。
11　ドルバック『自然の体系Ⅰ』高橋・鶴野訳、法政大学出版局、39p。
12　拙論『マルクスにおける唯物論と観念論』大東文化大学紀要53号、21-42p参照。
13　以上のチョムスキーへの言及は、『チョムスキー　言語基礎論集』福井直樹編訳、岩波書

店、2012年、288-365p参照。

14　サール、前掲書、115-143p参照。引用個所は要約である。

15　ヘーゲルの1805/06年の「精神哲学」の冒頭にこうある。「対象の存立、その空間は精神においては存在である。存在は存立の抽象的な純粋概念である。」(GW.8,185)　存在とはヘーゲルにとっては諸々の概念の存立が可能となる「精神の空間」なのである。なお「存在とは何か」については、拙著、『日常哲学派宣言』文化書房博文社、2006年、17-30p参照。

16　リベットの「精神場」は物質とは異なり且つ物質に働きかけることのできる実在的な場として想定されたものであるが、私がここで用いている「精神場」は比喩的なものである。

17　杉山幸丸『野生チンパンジーの社会』講談社現代新書、1981年、参照。

18　池内正幸編『言語と進化・変化』朝倉書店、2009年、の池内の「総論」参照。また山極寿一『人類進化論』裳華房、2008年、163-170p参照。

19　ラマチャンドラン『脳のなかの幽霊』山下篤子訳、角川文庫、2011年、394p参照。

20　本庶佑『ゲノムが語る生命像』講談社ブルーバックス、2013年、125p,194p参照。

21　ラマチャンドラン、前掲書、参照。

22　アントニオ・ダマシオ『無意識の脳　自己意識の脳』田中三彦訳、講談社、2003年、212-241p参照。

23　ラマチャンドラン、前掲書『脳のなかの幽霊』、372p参照。

23a　クオリア論は、カントの時代に流行した「汎通的規定」と同じ性質のものと思われる。「汎通的規定」とは個物を完全に規定しつくすことができるとする概念であるが、その概念は形面上学的空想と言う他はない。

24　本庶佑、前掲書によれば、全ての細胞のエネルギーを作り出すのはミトコンドリアだという。前掲書、39p参照。

25　真木悠介『自我の起源』岩波現代文庫、2008年、154-156p参照。

26　ラマチャンドラン、『脳のなかの天使』山下篤子訳、角川書店、2013年、350-1p参照。

27　ラマチャンドラン、前掲書『脳のなかの幽霊』、132p参照。

28　クリストファー・コッホ『意識をめぐる冒険』土谷・小畑訳、岩波書店、2014年、243-244p参照。

29　マイケル・トマセロ『心とことばの起源を探る』大堀他訳、勁草書房、2006年、80p参照。

30　アントニオ・ダマシオ『無意識の脳　自己意識の脳』田中三彦訳、講談社、2003年、331p参照。

(2015年3月20日受理)